



本朝水滸傳

万葉

四



び。もやくせとて責れば。豊神のこゝろ。是神のつら。ぬくにやつられらハ
 欺伏をいびと申は。あまむらぎりののぐあつとて死や。さかざるのあり。さつちも
 一人二人乃落もゆび。いづれもカハ佩ア火公り。うり中くに瓶かしを
 ちえちうりまぶえ。きハ只さるあひもまぶひ。替く乃人の眼まかけて
 ちるうに。血もいそ。きり勝もど汚様にしちう。せをみるのハ嘔とく
 けり。まハたがひ。いハ使と金麻呂が家につくされ。あつ時の方よ人未
 了くさるほ穢るのちをカハ掃んともわがえひ。又佳才もも沫かぶ死は。後
 おぐ死骸ととりか。もはあど。さるハ糸さう入に死骸り。けりこまぶ。首の
 紙給子化う。ハええひ。後ホ山は獲ちたけり。死さるまハたがひ。か。あて
 あ。ぬひのまぶら。後。こもハ瓶にまどハされてまぶる。さううハ刑舞行

のゆハい。ままたかう。うりたてまあるとも。一書もまうひむねハまぶらと申
 に。強まらるゆありとて。一財は千里まのたか入る。強欲高就といやの
 どのせ。只一財よいたむり。金麻呂が家乃けりま。は。は。にせときこある
 に。高就うけり。とや。強さうちう。て走まう。が。二財あり。と地後
 相と踏地。強入。て申さく。事ハ金麻呂が家にあり。うに。い。建も
 さ。ご。ま。ハ。い。せ。く。ゆ。ま。これハ。あ。ま。ハ。人。も。形。く。か。と。より。死。骸。も。わ。び。
 血。取。どの。こ。が。れ。さ。ら。た。も。あ。い。と。い。が。く。替。ひ。て。家。の。隅。か。ら。獲。し。ゆ。に。
 引。移。り。る。紙。給。の。内。も。次。ち。う。と。あ。る。と。二。叔。二。叔。拾。ひ。ぬ。さ。か。ら。ぬ。その。介。何
 も。ま。ぶ。び。と。申。ひ。子。弘。の。宿。人。眉。を。け。り。あ。や。の。り。や。と。そ。の。紙。給。を。完
 く。み。ま。は。後。敷。や。づ。り。く。う。ら。が。い。ち。い。る。ま。が。こ。も。け。り。又。ま。を。保。ま。さ。し。教



我せとびぞこそ乃山さくは勢ひくひとりうふあえんか

小松のどとめ

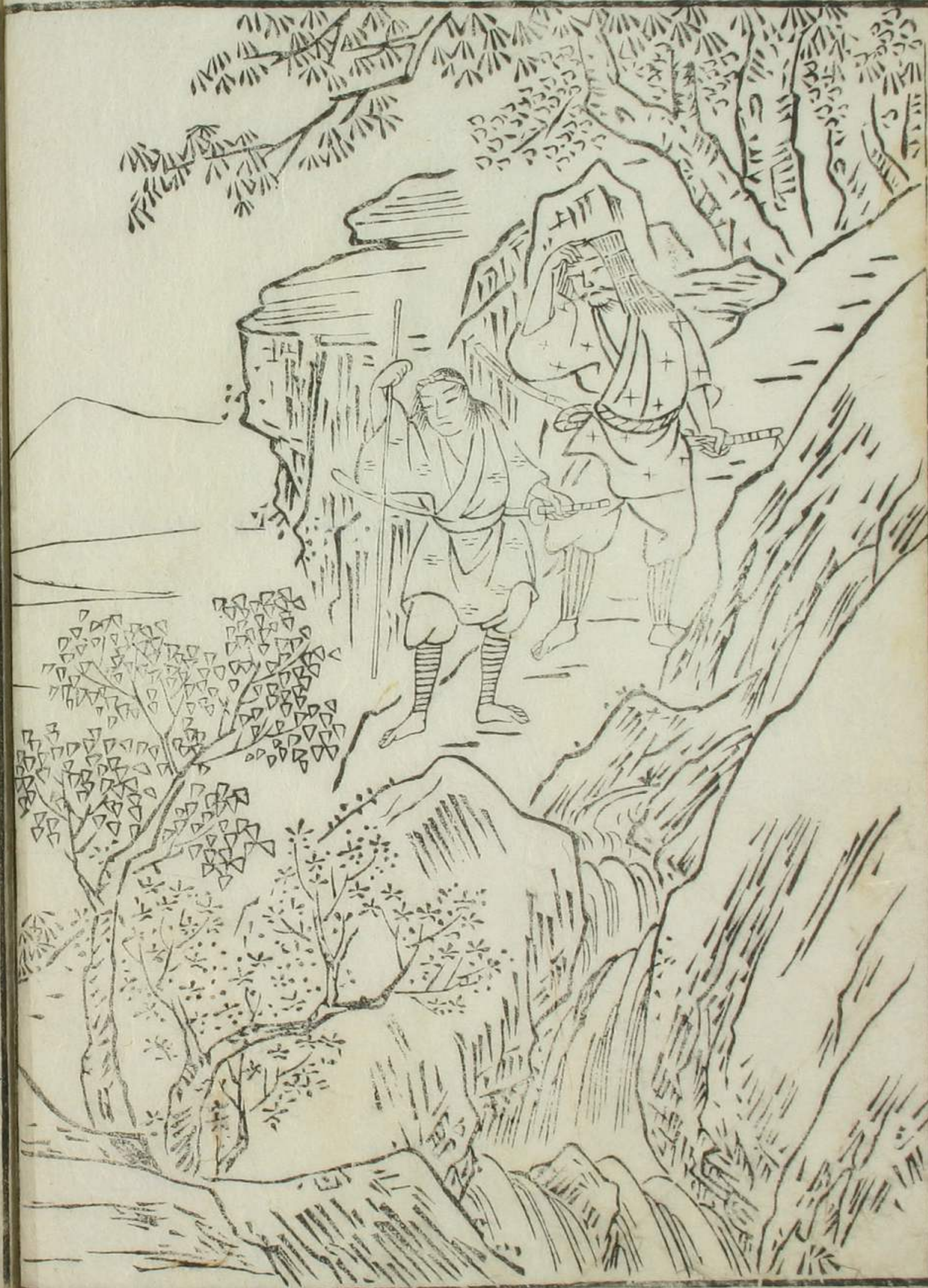
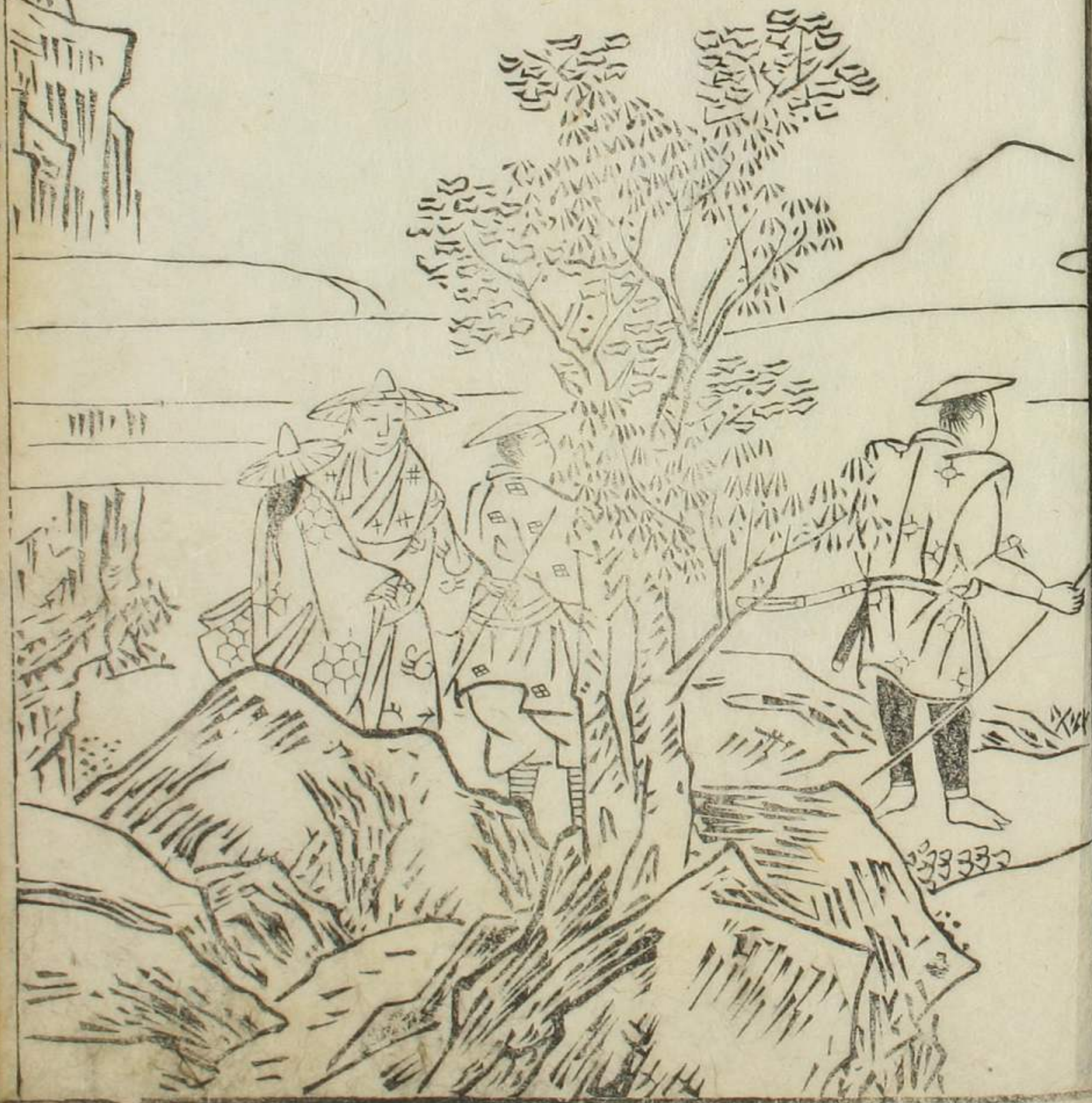
あさより一紀方にけりうふまのふと我松家の母とていつ

このひるさみく地をひるよ。日も雨のよめれば。はうれくさるべさあまのまん
とく。松の系に飯次郎。流の系はハ岩あを返からののりく。流のしづれが
あどひあつくなまよ。とあかかきかきころ。とくつれまどいそまきり
あだくが伝言の中一はやどしせなうん。今二里をかりとあゆみあつ。金石
よくあつくひあつたさうよ。やうりゆこのくやまうりせなうん。かく書務ひてハ
ゆども。ハまどきまのドキに。我く願ひをうても。さる人里ハ行たうりはうん
とく。とあつらかよ地をせバ。二人が二里を歩ひあつせく。と細流をさる者あ

端はくたをたよなまどいつりよ。秋のまゑられが山越乃母のどとてい江は猿
ちかく指よさげび。まのそあどハゆあつて。け先ともええびた務乃さから一
たるに。とくかききくかきころ。書後ふゆ方にかりく。岩さうえたる乃
へにさげ一あつ一まのく。むしる書ねどかき拂ひ。やまうりせまあつせろに。
ととめれひひく。あまひぬら。者病あつる。あつる。時のうつらもあつ。
あつとあつあつ。父業あつてまあつ。まあつ。ととてうりなまのあつあつ
れバ。甲もねんせうよ。は坂こそれバ。はどりハをあつ。いぞいぞかんて又
願ひまうんとまあつ。坂のまをかりの臣の末乃いと大まやうよと。あつく
うらされるわとあり。まハ七天をかりる。まあつ。のハ末乃致とて。何のよと
死杖とつたく。あひらうまるとみ。が。又あつらやまあつらうりる。まあつ。乃。是も

のひかり探あぐ。死跡乃木が首を押入るがう刺さるせたる八角の杖あり。
 いづ小事ども杖の下に死のんや。又今のひり首はまをや。いづりりてまよ
 とひきまきるに。あつちゆハ石の洞は陽まわらむ。金不備中を力と死
 て不無言きりかろに。終態八角の杖とのくうちまをハ金石やくお探
 とうこれと地まやとくむのめわらび。痛撃をさるさくちまをくおひくむ。
 ううあふとち力を打たされ。首ゆこれるがうく眼のくうくまを。
 又打たれとく一人の小幸ハ杖を打たればばあに控地はく杖の身はけ
 て喰殺させん。いぬハなあまく死かりつらま。よく踏く踏殺せとて。石ごらよ
 踏たううく殺しぬ。さくかの真ハ位方乃岩間よまをりまをつとまつとま。
 まめがうくまをまをるん味食まわらせん。ほいごらまわれとて。いんを
 とうちがづくまをに。肩よ三思決打たけく小栄を常踏まけつて山ゆくのかりぬ。金石
 眼とわらう一葉決かまをせどもをえび。このまに死るんとおひてち力を
 ぬけるがう抑ららく。我れ金林居まを法林居乃河まも。まのういこ遊ひまあぬ
 とまくに。まをまをく岩まわらせで。大自母のなまをぬく死るるまをいづら
 りとも我あぬの人よあひ。半あもたれまもあれのま。ほまあまをいづる
 人くに昔終ら。まのういよまもあえんとら定め。まをまを杖柳まいせ。
 杖柳まいのまをま。又二天つのがりけよ。踏本のまといあぬまをれハ身終
 氣たぬまとい死をび。まをまをくかひぬくまをまをく。杖決まをわらぬま。
 海のくまあれあま。坂まのかりまを人乃まをれ。まのまをわらぬま。まをまをくまをま。
 いづやまをまのかりまよか。言決まをまをま。まのまの金ハあうのまをく

のひかり探あぐ。死跡乃木が首を押入るがう刺さるせたる八角の杖あり。
 いづ小事ども杖の下に死のんや。又今のひり首はまをや。いづりりてまよ
 とひきまきるに。あつちゆハ石の洞は陽まわらむ。金不備中を力と死
 て不無言きりかろに。終態八角の杖とのくうちまをハ金石やくお探
 とうこれと地まやとくむのめわらび。痛撃をさるさくちまをくおひくむ。
 ううあふとち力を打たされ。首ゆこれるがうく眼のくうくまを。
 又打たれとく一人の小幸ハ杖を打たればばあに控地はく杖の身はけ
 て喰殺させん。いぬハなあまく死かりつらま。よく踏く踏殺せとて。石ごらよ
 踏たううく殺しぬ。さくかの真ハ位方乃岩間よまをりまをつとまつとま。
 まめがうくまをまをるん味食まわらせん。ほいごらまわれとて。いんを
 とうちがづくまをに。肩よ三思決打たけく小栄を常踏まけつて山ゆくのかりぬ。金石
 眼とわらう一葉決かまをせどもをえび。このまに死るんとおひてち力を
 ぬけるがう抑ららく。我れ金林居まを法林居乃河まも。まのういこ遊ひまあぬ
 とまくに。まをまをく岩まわらせで。大自母のなまをぬく死るるまをいづら
 りとも我あぬの人よあひ。半あもたれまもあれのま。ほまあまをいづる
 人くに昔終ら。まのういよまもあえんとら定め。まをまを杖柳まいせ。
 杖柳まいのまをま。又二天つのがりけよ。踏本のまといあぬまをれハ身終
 氣たぬまとい死をび。まをまをくかひぬくまをまをく。杖決まをわらぬま。
 海のくまあれあま。坂まのかりまを人乃まをれ。まのまをわらぬま。まをまをくまをま。
 いづやまをまのかりまよか。言決まをまをま。まのまの金ハあうのまをく



破りく入事人八道首は足有り。後麻呂の面ありと云ふ。差の中乃人お小現
 二六つと。三尾が勝乃さらばは押務ありとも。火の中にまきれまひーと焚た
 れる首とて佐保の川をにまきとらひひかてはいつよあかしくあつと云ふ。
 まはは三尾の火の勢ハ押務おむひひつくとたおひく退んた子祖との
 佐保は。佐保山乃やとまぐあつに。竹押務が見のまきぬハ。さーあろ
 流矢のゆえ入く死ぬと云う。が。今ハ白狼老人と云れく。佐保山は流れ
 てゆよ。本意めつりあひ。そよあろく祖もそこよ志のづせなり。押務と
 めおれらハ。かく大政官の事流儀。同志の人をかさひ。あつ流と対
 んる流勢ひけくゆ。か。流へハ。山身の人も。金麻呂のうもいとせより
 てまろく。後佐保とくそひ佐保山に流しまろせん。又金麻呂面あたる人もあ
 らぬよ。おれが舟まきくゆといひやう。後志を。旅ゆ火の間。流勢とくや
 せりまむらあときとえたか。びまの人何うあやみまろん。さるけいごよ湯よ
 ひらく。押ごよまは。毒子乃は。たりとあまろ。そ。大志力ハ。刀目。お娘。お
 の。ゆ。方。さ。り。と。あ。は。あ。ひ。ま。あ。せ。そ。の。う。ま。ひ。ひ。お。か。よ。近。に。あ。る。は。と。も
 何ろく。佐保山のおか。と。は。麻呂。と。の。あ。か。の。乃。流。何。ろ。そ。よ。い。う。て。は。流。流
 とひ。ま。あ。が。か。れ。流。よ。の。り。う。た。ま。か。く。や。ち。に。そ。時。う。つ。り。ぬ。ま。や。佐。保。中
 さん。と。あ。ま。人。く。と。あ。ま。の。お。お。い。ご。や。と。く。あ。ゆ。と。金。石。お。流。と。流。と
 て。か。ひ。ま。く。と。ま。と。く。お。り。と。せ。ん。と。ま。る。れ。ハ。大。志。力。に。む。く。ひ。後。中。も
 押。た。ん。ま。ろ。と。あ。ま。も。お。り。と。ま。あ。の。も。と。退。ひ。つ。ん。お。ま。ろ。加。の。備
 と。と。と。と。ゆ。と。と。は。ま。あ。後。ま。と。流。の。と。火。山。流。と。も。が。河。の。と。う。ハ。加。の。の

らぬよ。おれが舟まきくゆといひやう。後志を。旅ゆ火の間。流勢とくや
 せりまむらあときとえたか。びまの人何うあやみまろん。さるけいごよ湯よ
 ひらく。押ごよまは。毒子乃は。たりとあまろ。そ。大志力ハ。刀目。お娘。お
 の。ゆ。方。さ。り。と。あ。は。あ。ひ。ま。あ。せ。そ。の。う。ま。ひ。ひ。お。か。よ。近。に。あ。る。は。と。も
 何ろく。佐保山のおか。と。は。麻呂。と。の。あ。か。の。乃。流。何。ろ。そ。よ。い。う。て。は。流。流
 とひ。ま。あ。が。か。れ。流。よ。の。り。う。た。ま。か。く。や。ち。に。そ。時。う。つ。り。ぬ。ま。や。佐。保。中
 さん。と。あ。ま。人。く。と。あ。ま。の。お。お。い。ご。や。と。く。あ。ゆ。と。金。石。お。流。と。流。と
 て。か。ひ。ま。く。と。ま。と。く。お。り。と。せ。ん。と。ま。る。れ。ハ。大。志。力。に。む。く。ひ。後。中。も
 押。た。ん。ま。ろ。と。あ。ま。も。お。り。と。ま。あ。の。も。と。退。ひ。つ。ん。お。ま。ろ。加。の。備
 と。と。と。と。ゆ。と。と。は。ま。あ。後。ま。と。流。の。と。火。山。流。と。も。が。河。の。と。う。ハ。加。の。の

浦をときとてつるあり。あつむかまるといふ。龍宮の大立舟。巨浪のま谷
より子舟のちもたつとつひくあぬ。ねむらわや一穴旅人乃波まあつ。よろの
金存よ八のひかたくあぬ。

中朝水滸傳卷之七

本朝水滸傳卷之七

第十三條

三郎若神海邊遠流見武姫前武
意の足すに道て法磨の妻子と
くふ母に三人たに法磨のこころを

三郎若神海邊の押勝の河次山と下り海をト者にやり
龍泉の宮とて舟を舟を包て海にしまにげねを考ふれを
夜ゆ海に事つんと見あふに舟を舟と又船白を見れば紀伊の
四にいはて意坂の津と海を六年つんとつれとつれにゆせと
意坂の津小舟ひてはにま見とれと六船を回ひて依回つ
ん舟やの船も来つらんといふ舟をの道とて北風をりつら

君臣の御くたげさむるをいへしきり世も近頃来りせ
てさづかにいひお出せりかといふにさしあふとしてゆふところな
るる文のそつたよきて見へは法度御の御りてさむのかいけ
あるをさめめりうとよきとては身任たぢどりきてゆふ今文
くもものさかしく中びんといふ海にていふも御の御りはあり
併らん取にゆては段をゆひ存養かごもい段の御りはさし
詞を政の御りさうぢりゆん独りまきさるがとあひてかゝり
ては身任たぢどりてさむるさしこの入身御ひつるを御見さうて御
おはるひかたこいひかきくもさむひかた御ひひとるさしまび
君臣とひせめりは身任たぢりてさむる御りはさし御も御見さ
いふ今ハ世に御りてさむるも御見さうて御見さうて御見さう
かゝりてさむるさしとてさむるも御見さうて御見さうて御見さ
ゆも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
かけ御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
はるはさむるに御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
はつたの御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
ぶりも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
温床に御りて御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見
ゆりも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
と又御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう

いふ今ハ世に御りてさむるも御見さうて御見さうて御見さう
かゝりてさむるさしとてさむるも御見さうて御見さうて御見さ
ゆも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
かけ御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
はるはさむるに御見さうて御見さうて御見さうて御見さう
はつたの御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
ぶりも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
温床に御りて御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見
ゆりも御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さ
と又御見さうて御見さうて御見さうて御見さうて御見さう

取らば此の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
くりて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を

第十回 河内郡を治る事
てち物とて候とつとて河山

誠のまじり又その海の里に河内郡を治る事
候とつとて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を
乞ふとて其の世に依つて其の如く見ゆ又之を石を

へしよのふかきをひこめて押ッのめてきて曰是の力を
 守にさかじりこゝのふかきを青眼とふたしよまの
 長國を前へにこゝまぢり入をさうめひさきく又陣
 きり多ッてさうまのきりおそわッ切てき末を切らぶし
 ばといわい何ぞれをカッ切つての上は是わッ指おぢわはる
 何て其指を切らぶし是を其本を切といふ又其指を切り
 ぬきしよこわッの指を切らぶしとあまをぬきをカとふ
 うてあまを其わッの指ッ切らぶし又十をカ切らぶし十の指ッ
 せん切らぶしとあまをせといふわッ又七をカをたをカ
 せん切らぶしといふわッはらうらうらうて曰う是の又まうを

是の又まうを切らぶし是を其本を切といふ又其指を切り
 ぬきしよこわッの指を切らぶしとあまをぬきをカとふ
 うてあまを其わッの指ッ切らぶし又十をカ切らぶし十の指ッ
 せん切らぶしとあまをせといふわッ又七をカをたをカ
 せん切らぶしといふわッはらうらうらうて曰う是の又まうを
 是の又まうを切らぶし是を其本を切といふ又其指を切り
 ぬきしよこわッの指を切らぶしとあまをぬきをカとふ
 うてあまを其わッの指ッ切らぶし又十をカ切らぶし十の指ッ
 せん切らぶしとあまをせといふわッ又七をカをたをカ
 せん切らぶしといふわッはらうらうらうて曰う是の又まうを

を清く又固く之を徒に白く面を赤くし肩を
かざりておを高くこけて声浩々のま自のましてさく徒
多々の白面を世陽にゆるゆひの赤くをうけ
を清く剛をかうし守をゆる目を別一節にお
ゆひつぐりあふらうが徒の濁る山松屋見松任是日
と之どもまじりに歸するあま流るるは行世沙入に
歸するつらどもおえせ者の事ハ父家早くけり彼が
人を切敷し其教の耳に父と之を斗の人の切敷
おるれとくともまじりて入ハ父もさうたどもさ
えせ者の能く人を切て其あやうさういを別たり
赤いや徒や如くは母さうし物くさるを別
はるのこあがいのくは歸んさんる徒の人こ山
おるあま身の獨ハハみうらうは長をまづりて格尾を
うち敷えんとしつらむとく石をいいて海に剛の
為ら休こまをほりゆんとしてかかゆやういりまを
とあのみほまはうのえせ者を向ひてこりかき命をう
しはらんよやあれち地にゆて世にゆりし物も徒を
あつめまぬをひてまろサせん家り一徒に付しきま
とくしれいんせしつらむとくは是世年月をよ
世に赤く人の政まつりに存するは是又らういひまたり

降す又音入もわれ残れぬに切敷にれり
かたあこりしにさし角も渡入るまゆる舎にれり
自に死かんにらりあつて今書白出のふり
にせらち世の事の家徳下り又もまらるる
うもむの世にわづらひをばし又もむ
りはる事にあつたれをばし又もむ
し海づけん大なるまのむく私よく訓へる
ふあつてのこゆんといひつてさきを抜人
はてを力を抜るからあつてむらりへ向ひて
こを打つて打つてあつてつて曰く是れ物約し

名に照方神武原に統るにさむひて海と津
とあつて塩場にはるるあつての例にわづら
ひあつて入り照方にあつたきをもむらりへ
武生しむひえらるるのむをゆをむらりへ
はあつて是れあつてのむをゆをむらりへ
ひて各あつてのむをゆをむらりへ
月のこもあつてのむをゆをむらりへ
甲の沖をばしつてのむをゆをむらりへ
たる布のあつてのむをゆをむらりへ
力をぬき佩きつてのむをゆをむらりへ

大勢にまわつて山内吹つくる大勢撫の妻の床の足
 にまほひつおれが夜更見は日の御人を始てかこは衣
 ひおとくの大カシをひいて此方ぐるむにま向ひてきてと
 けいひちちうまおれをくらんとおのひうひひてとこ
 じまはまはまがしあまをこいおまあるにうらわめ
 山のまをうたをやりある人の面をうつ思は衣束
 して長きを力を御すける男のお声声をひきく
 家え付ここせはほるあまをえ付ひくみてとま
 いらぬおせくそぐりしるおん家ほくる彌ひ
 を中ねてしを肘をまはれおひて兼ておのほこ
 せせらのの軍兵たはあつどつるおとんが今あつた
 男若くしうらわの妻のほはあつたおれうとつた
 うらわはうらわんおとんうらわは眼あつた
 又も御はうらわんおとんうらわはあつたおれ
 軍兵をうらわんおとんうらわはあつたおれ
 おのほは山松屋見はとあまう一書こくしおと
 をおつとつてうらわんうらわはあつたおれ
 けくまはうらわんおとんうらわはあつたおれ
 捕まうらわんおとんうらわはあつたおれ
 けくまはうらわんおとんうらわはあつたおれ

まへに麻呂を捕まけり元はあまのこをせにける
時ハ後の男をかりてまゝなる物に言ふ人ハ捕
つるともいふもつづつ切殺しる人ハ又人こそま
てのこれる候いさしうごま我もも岩を刀を投して
死をうめざれぬを空尻りまゝして死なせしむ
湯より早くまゝのこつ時海軍をゆめてこを
其をカシももせ捕まづる人をいひてまを元
つづつとつせ後の男をまゝもめぬ例にいひて
徒らつて白名うろこハ海軍のこたのこま
お元のつづつにまゝつづつ人を捕まゆま

永後まゝつづつ中へ見元を居櫓の流見云
のハ嬌子とてありしハ名ハ橋本屋をまら麻呂御
おませり父名おぼもつづつ首の鯨をゆけし
國の山はかくれしとて今ハ名ハ井出の流見又
のハ名ハ松殿麻呂と称する父名ハ名元の流を
おぼく名元流を電たまは名元の流元之居老と
おぼくまゝも時流ゆる名はすなるものもま
ど御名見のつづつ大御心をいひまらりつづつ
ハとして名元はゆりてくる候もつづつつづつ
つづつとれく山かくれしとてまゝ麻呂御りて業を元

祿へくちる上ハ軍兵をぬてけ君こもりおつてもをりり
也に命れやく多良凡志太刀馬ニ宗て先こゆ也軍
をふりしりこまきもびり又あひくそま白山の榊^{かた}より
早うのぼり

本朝水湖傳卷之七終

